



TITLE:

左葉全摘術により治癒せしめた原発性肝線維肉腫の一例

AUTHOR(S):

山内, 陽一; 木下, 辰男; 西嶋, 義信; 寺浦, 哲昭; 中村, 諭

CITATION:

山内, 陽一 ...[et al]. 左葉全摘術により治癒せしめた原発性肝線維肉腫の一例. 日本外科宝函 1964, 33(3): 665-669

ISSUE DATE:

1964-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205722>

RIGHT:

左葉全摘術により治癒せしめた原発性肝線維肉腫の一例

国立姫路病院外科

山内 陽一・木下 辰男・西嶋 義信
寺浦 哲昭・中村 諭

〔原稿受付 昭和39年3月6日〕

Primary Fibrosarcoma of the Liver Treated by the Left Lobectomy

by

YOICHIRO YAMAUCHI, TATSUO KINOSHITA, YOSHINOBU NISHIJIMA,
TETSUAKI TERAURA and SATOSHI NAKAMURA

Department of Surgery, Himeji National Hospital, Himeji, Hyogo Prefecture

Primary sarcoma of the liver is not a common disease and usually it is described on autopsy cases. We present a case of primary fibrosarcoma of the liver, which was successfully removed.

A 65-year-old male was admitted to our hospital on May 7th, 1963 with the chief complaint of a painful mass in his upper abdomen which he noticed since 8 months ago and enlarged progressively. He had jaundice in 1948 which was treated easily. Physical examination revealed no abnormality in his chest. In the right hypochondrium an egg-sized tumor was palpated, tender on pressure. No evidence of abnormality was obtained from laboratory investigations except that liver function test showed slight damage.

With tentative diagnosis of hepatoma, surgical exploration was performed on May 13th, 1963. The tumor was strictly confined to the left liver lobe. No sign of metastasis to other organ was detected. The left lobectomy was carried out. Histologically, it was fibrosarcoma associated with liver cirrhosis. The patient was discharged on the 20 postoperative day with good condition.

Regarding the course and clinical symptoms, this case simulated the primary liver sarcoma. In comprehensive review on primary liver sarcoma by Herxheimer 149 cases were summed up, while in Japan we found only 20 cases ever appeared in the literature, among which the fibrosarcoma is seldom encountered.

緒 言

原発性肝肉腫は極めて稀な疾患で報告の大半は剖検例である。これに対して全摘治癒させ得た症例は本邦に於ては未だ数例に過ぎない。我々の症例は全摘手術により治癒して既に6ヵ月以上を経た現在元気に就労

中であり、且つ本例は組織学的所見に於ても甚だ稀な線維肉腫と診断された症例なので茲に報告し、併せて些か考察を加えたい。

症 例

患者：高島某，65才，甲。職業，鉄工所雑役。

家族歴：母親は胃癌。父親は胃癌。父親は脳溢血に
ていずれも死亡。

既往歴：20才で淋病。十数年前黄疸に罹つた事があ
るが治療により全治して居る。

主訴：上腹部腫瘍及び鈍痛。

現病歴：昨年夏（約8ヵ月前）より右上腹部に胡桃
大の腫瘍あるに気が付き漸次増大して来たが疼痛がない
ので放置して居た所、本年3月（約2ヵ月前）より夜
間上腹部鈍痛を来す様になつた。疼痛は食事に關係
なく悪心・嘔吐もない。食思正常、睡眠やや障害され
て居る。便宜一日1乃至3行、若年より酒を好み現在
1日2乃至5合、昭和38年5月7日入院。

現症：体格栄養中等度で全身状態は侵されて居な
い。頸部・腹窩部・鼠径部各淋巴節等の腫脹は証明し
ない。胸部も異常所見なし。黄疸も認めない。腹部は
全体としてやや膨満し特に上腹部に著明、両側腹部よ
り頭部に向う静脈怒張は認める。肝は右中鎖骨線上5
横指・弾性硬・辺縁鈍に触知する。正中線やや右より
で肋骨弓直下に鶏卵大の腫瘍を認め限局性に腹壁上に
膨隆する。触診で表面平滑・一部粗大凹凸を触れ弾性
硬・境界鮮明であるが、右端だけ腫脹した肝に移行し
境界不明である。呼吸性移動はあるが呼吸性には固定
し得ない。且つ腫瘍は腹壁直下に触知し腹壁腫瘍間
には遊離空間がなく胃腫瘍の触診所見とは趣を異にす
る。尚この腫瘍に一致して圧痛を証明する。脾・腎は
触知しない。肝濁音の上界は第5肋間。胃透視では胃
体部は腫瘍後方・左下方に位置し腫瘍とは全く無関
係、腫瘍による圧迫牽引も認めない。胆嚢造影で胆嚢
は正常に造影され胆石は陽陰影とも証明しない。亦胆
嚢の位置移動もない。

検査成績：血沈1時間88, 2時間104, 平均値70。白
血球数4300, 赤血球数470万, 血色素（ザリー値）87
%, 血液像は酸性好性球9%を示す他著変はない。肝機
能は高田反応0本, コバト反応R4(5), カドミウム
反応R6(8), モイレングラハト指数3, ヒーマン・ヴァン
デンベルヒ直接(-), 間接弱(+), CCLF24時間(+),
血清蛋白量8.0%, A/G1.07。尿検査は蛋白(-), 糖
(-), ウロビリノゲン弱(+), ビリルビン(-), 沈渣に著変なし, 梅毒血清反応何れも
陰性。糞便検査で潜血反応(ピラミドン法)陽性。

以上の所見及び検査成績から肝左葉腫瘍就中肝癌の
臨床診断の下に手術を施行した。

手術所見：上正中切開で開腹。更に左季肋部下方に
向け横切開を追加。腹水は証明しない。腫瘍は上腹部

体壁腹膜と癒着し、この部の腹膜には新生血管と怒張
静脈が集中して居る。そこでこの部分の腹膜3×4cmを
腫瘍側に附着させた儘開腹した。胃・腸・脾・腎等い
ずれも異常なく、肝は右中鎖骨線上約3横指腫大し、
表面は細分葉性乃至細顆粒状でやや硬、色調はやや白
色で肝硬変の像を示す。腫瘍は左葉上面に突出2コに
分れて発育し、左葉内前方に硬く浸潤腫大し、一方では
肝鎌状靱帯近くに及ぶが、この靱帯及び右葉には侵
入して居ない。右葉は視診触診上何等腫瘍浸潤その他
異常を認めない。よつて肝左葉全摘の適応であると決
意以下の操作を行なつた。まず肝下面に肝固有動脈
左枝の搏動を触知したので、肝切除時の出血を少なく
するためにまずこれを結紮切断。次で肝三角靱帯を切
離し肝左葉を全体として創外に引出し、肝臓鉗子が無
いので代用に脾臓鉗子を掛け、肝鎌状靱帯右縁に沿
い5乃至6個の集束結紮を行なつて肝左葉を切離した。
この際出血や胆汁流出は殆んど認められなかつた。断
端には特に漿膜を縫着せず、腹腔内に排尿管1本を挿
入して手術を終つた。手術時間は約3時間で出血量
922cc。術中1000ccを輸血し術中血圧低下その他の異
常は認めなかつた。

組織学的所見：Hematoxylin-Eosin 染色で紡錘型の
細胞が交錯束状に増殖し異型性著明。核分裂像も見ら
れ Van-Gieson 染色で細胞質より形成されて居る線維
が酸性フクシンにて赤く染まる。以上の所見及び塗銀
染色により線維肉腫と診断された。尚腫瘍以外の肝組
織は改染された肝小葉が偽小葉を形成し、グリソン氏
鞘に結合織の増生・円型細胞浸潤があり、門脈線維化
乃至肝硬変の所見を示して居る。

術後経過：術後全身状態良好。一時軽度の肝機能障
害・鼓腸等を示したが漸次回復し、術後20日に全治
退院した。術後4ヵ月目の肝機能は術前と大差ないが
赤沈は1時間28, 2時間66, 平均値30.5で好転して居
る。入院中及び退院後制癌剤としてEndoxanの注射及
び内服を続け術後6ヵ月の現在元気に就労して居り再
発の徴候は認められない。

考 案

原発性肝肉腫については1888年[Podrouzek]が13例。
1890年[Arnold]が自己の2例を加え23例を総括した。
以来[Herxheimer]の149例の蒐集がある。本邦では昭
和11年[柏村]に始めて報告され、以来20数例に過ぎ
ず、それも大多数は剖検例で手術を行なつた症例は余
の渉漁した範囲では昭和12年の[藤巻]例より昭和32年

の〔浦野〕例迄の6例に過ぎず、本症例は7例目に当る。

尚組織学的に肝肉腫の中でも線維肉腫は極めて稀なもので、剖検例も含めて〔伊藤〕の内外統計70例中に1例にすぎず、本例は恐らく本邦最初の1例ではないかと考える。尚肝肉腫の発生母地としては血管周囲結合組織及び肝小葉間乃至小葉内結合組織も考えられるが、本例の如く肝硬変を伴なうものはこれが発生母地となつて居ると考えるべきであろう。

結 語

65才の男子の原発性肝線維肉腫について肝左葉全摘を行ない治癒させた症例を報告し、あわせてその発生頻度を考察した。尚組織学的所見について御教示戴いた京都大学医学部病理学教室尾島教授鈴木助手に感謝致します。

(尚本症例は昭和38年10月6日近畿外科学会に報告した。)

文 献

- 1) 荒川 亮, 斎藤弘行, 足立敬二: 肝臓肉腫に対する肝左葉全切除の治療例, 小樽市医事研究会誌, 2: 46, 昭28.
- 2) 張紹淵, 張生妹, 角谷広男: 原発性肝臓肉腫の一症例, 日本臨床外科医集会雑誌, 16: 179, 昭30.
- 3) 藤村 密, 安井貞夫, 三浦 晏: 原発性肝臓肉腫の一例 日本外科学会雑誌, 57: 1952, 昭32.
- 4) 定永元明: 乳児原発性肝臓肉腫の一例, 外科, 19: 624, 昭32.
- 5) 志村秀彦: 肝腫瘍の外科的適応と治療, 臨床と研究, 35: 504, 昭33.
- 6) 浦野 晏, 木内信太郎: 原発性肝臓肉腫の一例, 信州医学雑誌, 7: 94, 昭33.
- 7) 松山研二, 良知照通, 岸 昌男, 高野正好: 肝に原発した細網肉腫の一部検例, 日本病理集會会誌, 47: 昭33.
The Gumma-Journal of medical science, 7: 191, 1958.



Fig. 1. Liver Tumor



Fig. 2. Cut surface

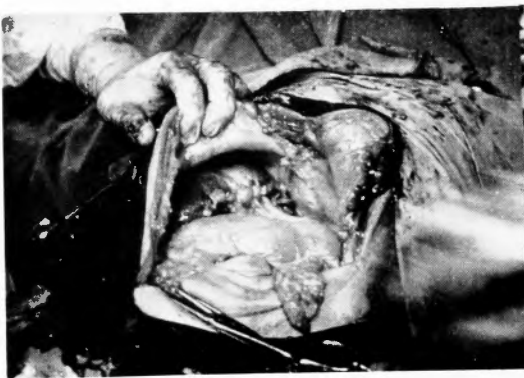


Fig. 3. after extirpation

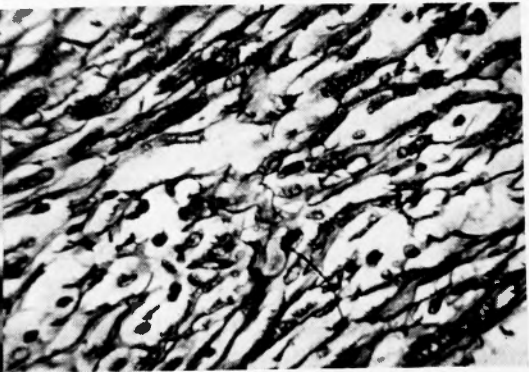


Fig. 4. silver emprnegation

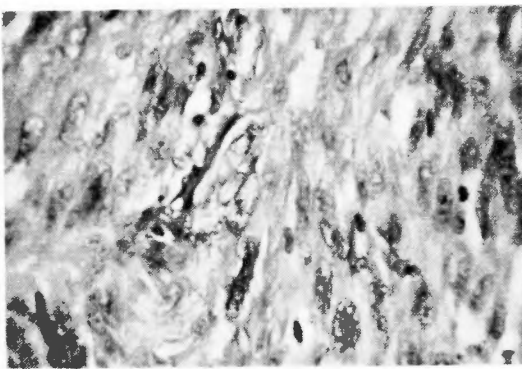


Fig. 5. H. E. stain

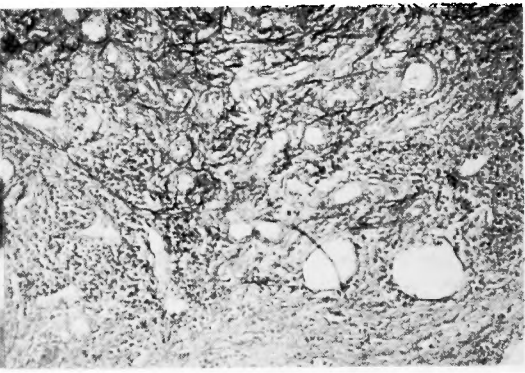


Fig. 6. Van-gieson stain

